

被災地と絆は切れぬ

県修学旅行支援が終了

東日本大震災で被災した福島県立浪江高校の生徒35人が29日、新居浜市瀬戸町の新居浜商業高校を訪れ、同校生徒と一緒に太鼓台を担いで交流を深めた。2011年度に始まった愛媛県の被災地学校修学旅行支援事業での招待で、今回が最後となる。

浪江高は、東京電力福島第1原発事故で約60キロ離れた福島県内の高校に移転し、仮設校舎で授業をしている。震災前約300人いた生徒は現在39人。11年に同事業で新居浜商を訪れたのをきっかけに、昨年8月には新居



法被を着込んで太鼓台に乗る浪江高の生徒ら
—29日、新居浜市瀬戸町

復興願いのソーリヤ

ソーリヤ、ソーリヤ。新居浜市の新居浜商業高に登壇した太鼓台。29日、同校を東日本大震

災で被災した福島県立浪江高生が訪れ、両校合わせて約350人が差し上げに挑んで一生の思い出をつくった。浪江高生は、今回が最後となる愛媛県の被災地修学旅行支援事業で招待された(3面に本文)



ひと味もふた味も違う感動の交流

愛媛県の「えひめ愛顔の助け合い基金」を活用した被災地修学旅行支援事業の最後を飾って、今年の1月29日、福島県立浪江高校が新居浜商業高校を訪れて交流しました。この「えひめ愛顔の助け合い基金」は、3・11後の2011年4月から寄附金の受け入れを始め、これまでに企業、団体、個人から1,053件、2億6,058万円が寄せられ、昨年2013年3月で受け入れを終了しました。

この基金を活用した被災者等支援事業で災害ボランティアを48団体、約千人を派遣しました。

また、修学旅行支援事業では27校、2,315人が

来県しました。そして、今回の新居浜商業と交流した浪江高校への支援がこの基金での最後の支援事業となり、この交流のために最寄りの松木坂井太鼓台も参加して花を添えました。

僅か数時間と言えども、一度、巨大な太鼓台を出すとなると準備などに相当数の時間と労力を要し、正直、資金、人員の調達は頭の痛い課題でありました。取り分け、平日の昼間にどれだけの人が参加してくれるのだろうかと不安に駆られたであろうことは想像に難くありません。

それでも松木坂井太鼓台の関係者の「被災地の生徒さんを少しでも励ますことが出来れば」との熱意から関係者は当日、わざわざ休暇を取るなどし約90人の参加を得、資金の調達も当初の予想を遥かに凌ぐなど、これら多くの課題を克服しての当日の見参と相成りました。これは単に祭りが好きだから、太鼓台が好きだからという理由だけで為したの皆さんを何としても励ましたいという熱い思いが様々な困難な課題を克服したのだと思います。

浪江高校は、福島第一原発事故の関係で現在は約60キロ離れた本宮市高木の本宮高校に移転し、仮設校舎で授業をしており、震災前には約300人いた生徒さんは今では39人となり、そのうちの35人が今回愛媛県を訪れました。

私はこのように被災地への支援は、それはそれで大事なことではありませんが、愛媛の生徒を原発による事故で浪江高校のようにしては絶対ならないと改めて感じました。

今回の交流で浪江高校の皆さんは生まれて初めて見る太鼓台の大きさとその迫りに驚嘆し、そして太鼓台を普段見慣れているはずの新居浜商業の生徒さん達もこの日ばかりは正々堂々と太鼓台に触れ、そして担ぐことが認められただけに、特に女子生徒さんたちは大いに盛り上がったとのことです。

両校生徒が息を合わせた「ソーリヤ、ソーリヤ」の掛け声で見事な差し上げを成功させた。

浪江高3年の半谷竜一(18)は「太鼓台は元気に過している」と愛媛の浪江高生を寄せ、エネルギーを福島に持

「えひめ愛顔(えがお)の助け合い基金」を活用した同事業では3年間で岩手、宮城、福島の3県から延べ27校2315人が来県した。総事業費は約2億円。愛媛県観光物産課は「被災地と愛媛の学校交流の素地ができ、今後も取り組みに協力したい」としている。(末光敏、山岡雄大)

「えひめ愛顔(えがお)の助け合い基金」を活用した同事業では3年間で岩手、宮城、福島の3県から延べ27校2315人が来県した。総事業費は約2億円。愛媛県観光物産課は「被災地と愛媛の学校交流の素地ができ、今後も取り組みに協力したい」としている。(末光敏、山岡雄大)

役割を果たしてくれた新居浜商業高校の皆さん、そして松木坂井自治会、太鼓台の関係者に心からの感謝の意を表したいと思えます。

今回の浪江高校を始めこの3年間で本県を訪れた27校、約2,300人の生徒さんたちは愛媛の地で多くの出会いを得、そして多くの人の情に触れ、一般的な修学旅行とは一味もふた味も違った感慨や学びを得たのではないかと推察します。

(石川みのる県議の2月県議会一般質問からの抜粋。一部編集)



新居浜を訪れた浪江高校の先生方